

中村光夫全集

第三卷

中村光夫全集

第三卷

筑摩書房

中村光夫全集 第三卷
昭和四十七年七月二十五日発行

著 者 中 村 光 夫

発 行 者 井 上 達 三
東京都千代田区神田小川町二ノ八

発 行 所 筑 摩 書 房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一九一
電話 東京都 七六五二(代表)
振替 東京 四 一 二 三
印刷 株式会社 精興社
製本 牧製本株式会社
落丁・乱丁本はお取替いたします

(分類) 1395 (製品) 72503 (出版社) 4604

第三卷目次

柳北・兆民……………3

福沢諭吉……………7

坪内逍遙

坪内逍遙と二葉亭四迷……………24

逍遙・四迷……………36

逍遙・四迷・透谷……………46

北村透谷……………63

幸田露伴

露伴の死……………74

「連環記」……………82

尾崎紅葉……………87

夏目漱石

漱石私感……………98

文学者の旅行記……………111

漱石の思想……………116

文明開化と漱石……………126

漱石の青春……………137

鷗外と漱石……………156

文学と俗物性……………167

文明批評家としての漱石……………177

人物再発見——夏目漱石……………181

夏目漱石の作品……………191

「吾輩は猫である」……………209

「三四郎」……………214

森 鷗外

鷗外とその周囲……………224

田山花袋

田山花袋小伝……………238

田山花袋論……………253

蒲団と浮雲……………291

田山花袋の文学……………301

「百夜」……………310

「蒲団」と「百夜」……………312

国木田独歩

俗人独歩……………322

独歩の短篇小説……………324

「酒中日記」……………329

「空知川の岸辺」……………333

近松秋江…………… 339

岩野泡鳴

岩野泡鳴小伝…………… 346

岩野泡鳴の作品…………… 361

真山青果…………… 369

徳田秋声

「足迹」など…………… 376

「徴」…………… 379

「元の枝へ」…………… 383

「縮図」…………… 384

島崎藤村

藤村の文学…………… 390

正宗白鳥

「破戒」	397
「春」	400
「海へ」	405
「飯倉だより」と「春を待ちつつ」	408
「嵐」	411
「街道」の精神	414
正宗白鳥	420
正宗白鳥の文学	431
人と文学	435
正宗白鳥の作品	450
「微光」	476
「ある日本宿」	484
「異境と故郷」	487
「根無し草」	489

「作家論」	492
「自然主義文学盛衰史」	497
「日本脱出」	500
「流浪の人」ほか	508
自然主義文学概説	513
自然主義文学以後	541
明治末年と大正初期	579
漱石・鷗外と漢文学	590
明治・大正の作家	601
解題	615

作家論（一）

柳北·兆民

成島柳北

天保八年二月十六日——明治十七年十一月三十日（一八三七—一八四四）漢詩人、新聞記者、隨筆家。名は温、のちに惟弘。甲子太郎、のちに甲子鷹と称した。江戸・淺草に生れた。幕府の儒臣成島稼堂の子、八歳のとき和歌集を著した。安政元年十八歳で家をつぎ、幕令により祖父成島東岳の著書「東照宮実記」五百余卷の編集を監修し、三年侍講となり、父の著書「後鑑」三百七十五卷の訂正を試み、万延元年に完成した。安政六年から万延元年にかけて「柳橋新誌」を執筆した。文久二年時勢を諷した詩が幕吏の忌諱にふれて閉門を命じられたが、閉居中に英学者と交はり英学を専攻し、戯筆「伊都滿庭草」を草した。慶応元年秋、幕府は兵制を改革、柳北を歩兵頭並に任じ禄千石を与へた。冬、騎兵頭並に転じた。翌二年には横浜に転居し軍事にはげんだ。三年夏、騎兵頭に上り、二千石に増俸したが、彼の意見が行はれなかつたことから辞職した。慶応四年一月外国奉行に任じられ、ついで会計副総裁となり参政班に列したが、徳川慶喜が職を辞するや同職を退いて隅田川畔に隠居した（十三歳）。この年編んだ自伝は、「真に天地間無用の人となれり、故に世間有用の事を為すを好まず」の句で結ばれてゐる。その後は政府の徴にも応ぜず、明治五年東本願寺法主に従つて欧州に遊び、翌年帰朝して、旅行記「航西日乗」（明治十四—十七年）を著はし、「柳橋新誌」第二編（明治七年刊）を出し、七年朝野新聞社長となり、雑録その他に健筆をふるひ、鋭い諷刺で政府を脅かし、当時の新聞記者の第一人者となつた。九年筆禍により四十日間入獄、「柳橋新誌」第三編（明治九年稿）は発禁となつたが、翌年「花月新誌」を出した。その間各地に遊び、紀行文も発表してゐる。

柳北の文才は多くの短文に示されてゐるが、主著としては「柳橋新誌」である。第一編は寺岡静軒の「江戸繁昌記」にならつて、柳橋の花街の風俗を描いたもので、漢文で書かれた洒脱な戯文が人々に喜ばれた。第二編は

明治維新の変動が、この花街に及ぼした変動を批判的な眼で捕へたもので、前作に比して皮肉、諷刺の味はひが濃くなつてゐる。第三編は、序文が伝はるだけである。その他、「航西日乗」はパリを中心とした興味ある旅行記である。「成島柳北全集」全一卷。明治三十年七月、博文館刊（「文芸倶楽部」臨時増刊の形で刊行）。

中江兆民

てなかみん 弘化四年十月一日—明治三十四年十二月十三日（一八四七—一九〇一）仏学者、政治家、評論家。幼名は竹馬、のち篤介と改めた。土佐・高知新町に下級武士の子として生れた。慶応元年土佐藩留學生として長崎に行き、三年後藤象二郎の援助で江戸に出、村上英俊、箕作麟祥らにフランス語を学んだ。明治四年大久保利通の援助で司法省出仕となりフランスに留学し、文学、哲学、歴史を研究し、西園寺公望、馬場辰猪らと交つた。七年帰国し、仏学塾を東京・麹町番町にひらき、フランス語のほか法律、政治、哲学、文学、歴史などを教授し、門生は前後二千人をこえた。翌八年に東京外語学校校長に任ぜられたが実学的教育方針に反対して儒学的徳育を主張して容れられず三月で辞職、ただちに元老院権少書記官に任ぜられ、十年一月これを辞したのちはふたたび官途につかなかつた。その後、仏学塾の発展につとめるかたはら、漢学者岡松甕谷の紹成書院に入門して漢学の素養をふかめ、禅学もをさめた。十四年三月十八日西園寺公望を社長、兆民を主筆として「東洋自由新聞」が発刊され、自由民権を主張したが、政府の圧迫のため、四月三十日に第三十四号をもつて廃刊した。翌十五年兆民は仏学塾から半月刊の雑誌「政理叢談」を発行、ルソーの「社会契約論」の漢訳「民約訳解」（明治十五—十六年）を連載した。これはやがて分冊の単行本としても刊行され、同時代の社会に大きな影響をあたへ、兆民自身も「東洋のルソー」とよばれるに至つた。十六年から翌年にかけて「維氏美学」上下を刊行した。十九年には哲学における立場を明かにした「理学鉤玄」、大革命前の仏国史「革命前法朗西二世紀事」を刊行し、翌二十年には社会批判と

同時に著者の思想告白の書ともいふべき「三酔人経綸問答」、仏学塾編の「仏和辞林」を刊行した。同年には後藤象二郎の民権派統一運動に参画し、保安条例によつて東京を追はれ、翌二十一年一月から大阪で「東雲新聞」を発刊し、主筆として活動した。二十三年憲法発布にさいして追放をとかれ、第一回衆議院議員に大阪から当選した。自由党に属し、第二次「自由新聞」「立憲自由新聞」「民権新聞」などの主筆となつたが二十四年議員を辞職し、「北門新聞」の主筆として北海道へ渡つた。翌年北海道で実業に従事したが失敗して帰京、以後数年実業家として失敗をくりかへし、三十三年「東京毎夕新聞」主筆となり、翌年喉頭痛のため余命一年半と宣告され、随筆「一年有半」(明治三十四年刊)、哲学書「統一年有半」(明治三十四年刊)を刊行して世評を得、同年末に歿した。「兆民選集」全一卷。昭和十一年四月、岩波書店刊。

【一年有半】いちねんあはん 随筆集。明治三十四年九月、博文館刊。同年中に十八版を重ねた。三部にわかれてゐるが、いづれも大阪府の堺市で執筆された。「生前の遺稿」といふ副題のもとに、門生幸徳秋水によつて編集され、巻末に雑誌「百零一」、「毎夕新聞」に書いた旧稿を収めてゐる。身辺の記事から政治、文芸、演劇などの批評、人物論、随想など筆のおもむくままに論じて、おのづから著者の見識と社会批評が滲みでてゐる。

【維氏美学】いしひび 翻訳。二巻。明治十六年十一月、十七年三月、文部省編輯局刊。フランスの学者ウージェヌ・ヴェロン原著の「エステティック」を文部省の依頼で翻訳したもの。二部にわかれ第一部は芸術美の本質の探究に、第二部は芸術の類別として、建築術、彫刻、画学、舞踏、音楽、詩学の各章にわかれ、詩学中の小説の部ではバルザックはじめフロオベル、ゾラなどの自然主義作家にも言及されてゐる。我国はじめての美学のまとまつた紹介として有名である。

福沢諭吉

福沢諭吉

一

明治文学の研究は近ごろますます盛んです。透谷、独歩、啄木など、生前は不遇、不幸であつた詩人たちの業績があらためて評価され、彼等の生涯の輪郭は、同時代の人々の大部分、ことによると彼等の友人さへ知らなかつた秘密の面まで、明かになつてきてゐます。

これにくらべると、明治時代の思想家の仕事や生活は、現代の関心をひくことがずつと少いやうです。福沢諭吉の名はさすがに今の人たちにも知られてゐるやうですが、明治の初年に彼とならんで大きな影響を、著作によつて青年にあたへた中村正直は今日ではほとんど忘れられてゐます。

福沢、中村等とともに明六社を組織した西周、森有礼、加藤弘之なども今日ではほとんど口にする人がなくなりましたが、近代の我国の政治思想、哲学思想の発達史の上からは、逸することのできない人たちです。

さらに、諭吉が「時事新報」の主筆としてさかんに論陣をはつてゐたころ、彼の同業として同じやうに強い影響力を、それぞれの立場から読者に及ぼした栗本鋤雲、福地桜痴、成島柳北等も、今日ではたんに歴史上の人物として一部の人々に記憶されてゐるにすぎません。

これは、彼等の仕事の性質上、当然のことかも知れませんが、それだけに僕等が明治時代のことを考へる場合に、忘れてはならないのは、同時代の読者に及ぼした影響の点では、これらの思想的ジャーナリストの存在は、小説家や詩人などくらべて比較にならないほど大きかつたといふことです。

かりにひとりの典型的明治人を想像すると、彼の頭腦を支配して教養を形造つたのは、同時代のなかでは主と